

街にも海にも開かれた《編む港》

三原の歴史深い街と、瀬戸内を感じる海が相互に浸透する「街と海を《編む港》」を提案します。海の街に快適な環境を生むランドスケープデザインと、創造的な使い方を生むコミュニティデザインを重ね合わせ、すべての人に開かれた新たな出会いを生む港です。



編む港のコルポ

市松配置の内部と軒下



街路から見えるアイストップとなる屋根



24-Minute type to Weaving Port type



編み目型(縫合・開放・相互浸透)の開かれた公共空間として、原の新しい交流拠点にします。

つくるとつかうの議論を連携させる



《管理技術者・総合主任担当》 地域資源活用施設実績豊富
《設計技術者・総合主任担当》 構造・設備・交通設計実績豊富
《管理技術者・総合主任担当》 地域資源活用施設実績豊富
《設計技術者・総合主任担当》 構造・設備・交通設計実績豊富

【つくる】だけでなく【つかう】の専門家をチームに加え、双方の議論を促進・連携させることを提案します。例えば高校生と社会実験を行ったり、港の新しい使い方を考えたり、港づくりを自分事とする気運を【育て】ます。

「にぎわいづくり」に寄りし港が感じられる景観を形成する施設づくり



内部空間を市松状に分散させた配置により緩やかな軒下空間が繋がり、海と山。そして街への抜ける景観が生まれます。

内港西側にもある古くからの親水の知恵・雁木を高低差をつなぐ居場所づくりのツルムとして参照し、現況に対応しながら、様々な姿勢を受け止めます。



高低差のあるねじれ屋根の上下を視線が抜け、街から海を、海から街を近く感じる事ができます。

港を訪れた誰もが港内の回遊ができて快適に安心して過ごせる施設づくり



緩やかに進行する軒下空間により動線の選択肢や分りやすい回遊性、周囲での活動の連鎖などにより安心感を生みます。

既存胸壁に雁木を組み合わせたことで、これまでバリアであった胸壁を、安全で多様なアクセスを受け容れる居場所へと転換します。



全ての場所に車椅子で行けます。GL±0の待合室を設け、最低限の高低差も緩やかなスロープでバリアフリーとします。

魅力的でありかつ合理的で実現性の高い施設づくり



市松配置は計画時の柔軟性を持ちます。豊富な軒下空間はさまざまな活動を受け止める汎用性の高い、使いやすい場です。

既存胸壁は公園全体でできる限り移動せず、現況の特徴をそのまま活用。工期工費を削減しながら、三原港に固有の豊かな居場所をつくれます。



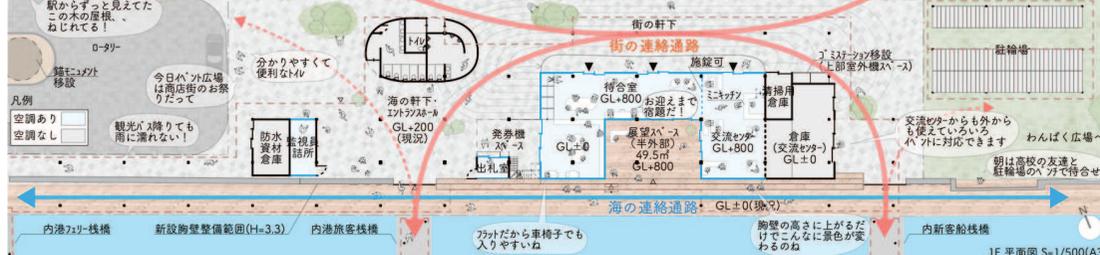
高潮や塩害に備えるとともに、居心地や省エネ、CCも両立する設備・構造計画とします。



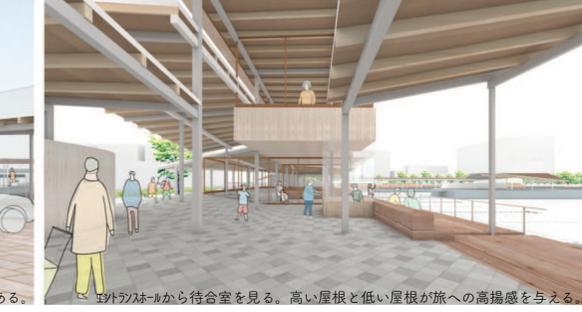
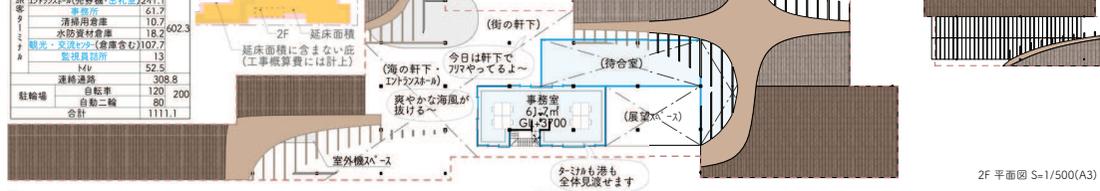
構造は屋根単位ごとの大きさに合わせて、適正で無駄のない鉄骨部材により強固なフレームを形成します。

日常と非日常が共存する平面計画

市民の生活の場であり旅行者の発着点でもある港。さまざまな人々が共存し、豊かな時間を過ごせる軒下が広がります。

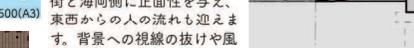
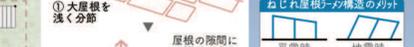


用途	面積 (㎡)
旅客待合室	97.4
展望バス(半外部)	241.1
発券機	16.7
清掃用倉庫	110.7
水防資材倉庫	602.3
観光・交流センター(倉庫含む)	107.7
監視員事務所	13
トイレ	52.5
連絡通路	308.8
自転車	120
自動車	200
合計	1111.1



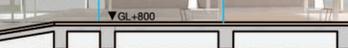
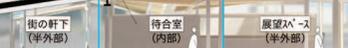
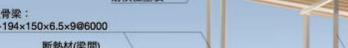
街と海を編む屋根形状

街と海を編む屋根形状



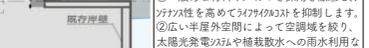
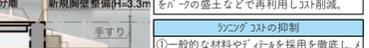
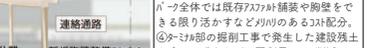
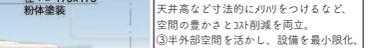
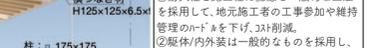
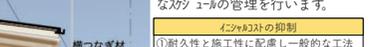
街と海を編んでつなぐ断面計画

眺望や視線の抜けなどをはじめとしたタテマシとしての魅力に、安全性・実現性・環境性能などをバランスよく重ね合わせます。



きめ細かなコスト管理の徹底

課題の比較検討を設計初期に集中して行う70/30-デザイン手法で、確実なコスト管理を行います。



街の軒下から筆影山を見る。船に乗らない人も立ち寄りやすい新しい港の顔。展望バスを見る。胸壁の干渉がなく、それだけで贅沢な三原ならではの風景。国道からタテマシ越しに筆影山を見る。ねじれた屋根の上下から海や山を感じることができる。